

近年、農の効用の再認識に伴い、都会と農村の連携が図られるようになってきたが、実態は、(一般市民にとって)農の現場(環境)と生活空間とが農作物を通してのつながりを超えるものではない。これでは農にかかわる人や自然との関係性が霞がちとなり、時には生活空間における農の存在が正しく理解されないことにもなりかねず、ひいては人間形成に少なからずの影響を与えるのではと危惧される。

ここでは、農がおりなす風景と食における農作物の扱い方に着目し、農により育まれる(健康的な)意識について事例紹介を含め考えてみたい。なお、用語「農」については業の農のみでなく広い意味の農とした。

(1) 農がおりなす風景。

都会では農の環境を求むべくもないが、それでも、ポケット農園や街中農園といった農の空間がある。

これに対して田舎では問題がないように見えるが、最近の車社会で大人が農道を歩かなくなり、また農地には農夫が昔に比べみられなくなり、田畑と人がおりなす光景に浸かるといった恒常的な体験ができにくくなってきている。このため、自然の光景を(時には立ち止まり)時には歩くことにより培われる日常的な感性の育ちが危うくなり、田舎から自然を守るという(使命というべき)意識が霞んでいくかのように思える。

それにもう一つ、農体験を売りにする観光農園について。農の光景という観点からいえば、観光農園では土地の有効利用が先行気味であるだけに、農空間が地域全体という広がった空間に馴染むことが今一つではなかろうか。今後に向けては、地域(空間)と農空間の一体という意識の日常化に期待したい。

ここで絵になる一例を山村の農からみる。農空間が山村の空間と馴染めば、農作業がそこに息吹き、ドラマも生まれる。農地耕作や収穫の光景は人と土とがおりなす絵巻模様のごとくであり、農作業を介して作物と土が一体であるという実感が微笑ましいドラマを作っている。(写真1,2)

(2) 食卓における農作物

些細なことからひとつ。特に若い人には柑橘類の人氣が今一である。理由は皮むきの際に手が汚れること

にある。最近ではサービスの一環として利用者に便宜を図るために、皮むき手間無し、汚れ無し、食べやすさを狙ったカットフルーツに人氣が高まっている。これも確かにオシャレな食べ方であるが、今必要とされていることは、農作物の原形を観ながらの接食が農からの生命の授かりという意識の育成であり、子どもの健全育成には欠かせない。

ここで絵になる一例をみる。山村の古民家で子どもを集めてスイカを食べた時、子どもは放射状にスライス分割したスイカを見て驚き、種の処置に困っていた。種については、口から勢いよく飛ばすことを年長の子どもが年少の子どもに手本を示しながら教えていた。その光景が実に微笑ましいドラマであった(写真3)。

(3) おわりに。

主張は、農の生育環境の健全さを体感し、その上で食を味わうという人間本来の行動を楽しむべきこと。我らは、そうした意識を持ち自然環境の農とともに生活環境づくりに励み、これをもって子どもの育成の健全化に努めたい。これが農環境を取り込んだ生活環境づくりである。なお写真は川端英徳氏撮影。感謝したい。



写真1 畑の耕し



写真2 ジャガイモ収穫

写真3 皆でスイカを食す